

研究ノート

マスク着用保育によるアタッチメント形成の限界

— 科学的知見を用いて考える —

七木田 方 美

はじめに

COVID-19パンデミックが3年目となり、保育者のマスク着用保育が感染予防の観点から定着しつつあります。本論では、著者が2022年7月～8月に実施した研究結果を、ハーバード大学子ども発達支援センターが2004年に出した発達途上国に対する国家会議ワーキングペーパー1「子どもは人との関わりの中で育つ」をもとに、マスク着用保育の限界を科学的な観点より論じるものです。(NATIONAL SCIENTIFIC CONCIL ON THE DEVELOPING CHILD. Young Children Develop in an Environment of Relationships working paper 1)¹⁾

問題提議

保育者のマスク着用を含むCOVID-19禍における新しい生活様式が続き、乳幼児に変化があることが、乳児クラス(012歳児クラス)の保育者への調査から明らかとなりました。

調査は、COVID-19パンデミック第7波直前の令和4年6月～7月に実施しました。対象は広島県内における保育施設で、乳児クラスの子どもの変化を調査したところ、子どもの変化を感じている保育者は右のグラフに示した通り、「変化があると感じている」「変化が強くあると感じている」を合わせると8割を超えました(Fig. 1)。これは、本調査の1年前の令和3年7月～8月にかけて実施した調査結果よりも1割ほど高い値となりました^{2) 3)}。

また、「会話や表情による先生とのやりとりが、長続きしないように思う」と感じている保育者は45%でした。他にも子どもが「泣いて訴

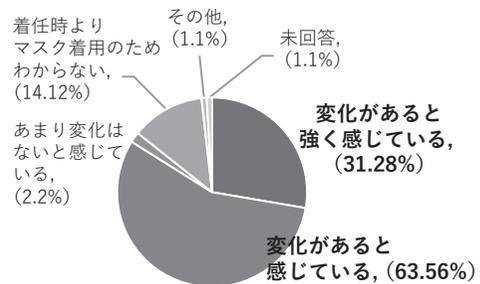


Fig. 1. 保育者のマスク着用により子どもたちに変化はありますか(数字は012歳クラス担当保育者112名中的人数、%)

前年度(令和3年)調査では、着任時よりマスク着用のため変化が分からないという保育者を除く158名中を分析したところ、「変化があると強く感じる」「変化がある」を合わせると78%でした。本調査では「着任時よりマスク着用のためわからない」という保育者も含めた割合を示しているが、除くと92%の保育者が子どもに何らかの変化があると感じています。

える「表情が乏しい」といった保育者の実感は、保育者のマスク着用が影響していると考えられます。

特に、マスク着用により、「便のにおい」が分かりにくいと実感している保育者は約7割でした(Fig. 2)。保育者のマスク着用により、毎日のケア、応答的なかわりが難しくなってしまったことが伺えます³⁾。

人生で最も脳が発達し、特に感覚の発達が著しい乳児期において、保育者との応答的なかわりの欠如は、子どものアタッチメント形成に支障があると考えられ、その子どもの人生の土台となるアタッチメント形成の支援は急務です。

子どもの発達に欠かせないアタッチメント

乳幼児の健全な成長発達には、家族にかかわらず、その子どもに関わる重要な存在となる保育者等との関係の質と信頼性によって左右されます。子どもに関わる家族内外の大人によって、アタッチメントは形成され、子どもの脳の構造の発達にも影響します^{4) 5) 6) 7) 8) 9)}。

成長発達を促す人間関係とは、その子の素因(気質・体質)に基づいた個性(興味・関心・能力・主体性)や子どもの自己認識を形成し、心の成長を促すような体験を提供するパートナーとの継続的な総合性のある応答的なかわり『サーブ&リターン』が基本です¹⁰⁾。

乳幼児は自分の世界を人との関わりから経験します。人との関わりは、乳幼児の知的、社会的、感情的、身体的、行動的、道徳的な発達のほぼすべての側面に影響を及ぼします。乳幼児期の安定した人との関わりは、自己肯定感や自信を高め、情緒の安定をもたらします。さらに、学習意欲を高め、学校生活やその後の人生における成果につながります。攻撃的な衝動を抑え、非暴力的な方法で対立を解決する能力、善悪の区別、気軽な友人関係や親密な親友といった関係を構築し、それを継続させる能力にもなります。そしてやがて、親として成功することにもつながります。このように、乳幼児期における人との関わりは、人生において非常に重要で様々な発達の成果の基礎を築くのです。

乳幼児期の人的環境は、健全な成長発達に不可欠な「栄養素」となります。不可欠な「栄養素」とは、乳幼児期における人との関わりから得られる子ども一人一人に応じた対応、相互の交流、そして情緒的なつながりです。乳幼児期に関わる親、祖父母、保育士、先生、隣人、コーチなど、乳幼児が認識できる人たちによって大切な「栄養素」をもらうのです。そしてこの乳幼児期の人との関わりは、子どもたちが、自分が誰であるか、何になれるのか、そして他の人々にとって自分がどのように、そしてなぜ重要であるかを明確にしていきます^{11) 12) 13) 14) 15) 16) 17)}。

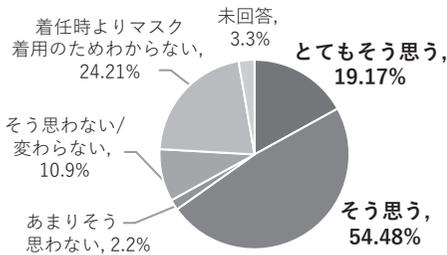
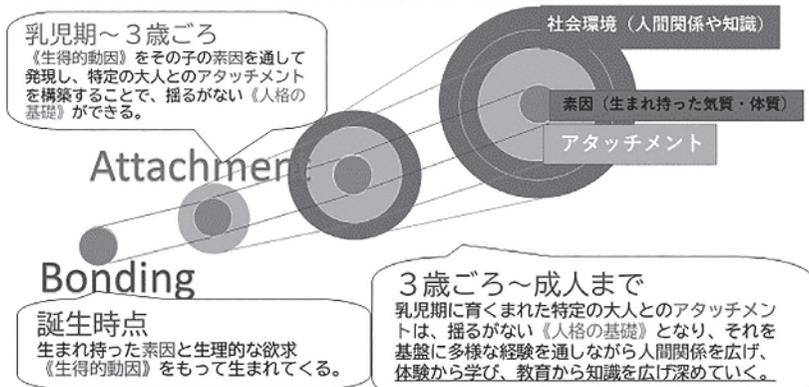


Fig. 2. マスク着用で便の匂いに気付きにくくなった (012歳児クラス担当保育者112人中の割合)

65%の保育者が、便の匂いに気付きにくくなったと解答しました。保育者がマスクをしていることにより、子どもがおむつに排泄をしたとき、タイミングよく取り換えられていないかもしれません。

子どもは素因を基盤に環境との相互作用で成長する



性格の成り立ち (富田和巳: 小児心身医学の臨床. 診断と治療社. 2003) を参考に七木田が作成 (2020)

Fig. 3. ボンディングとアタッチメント



Fig. 4. 「トンカツ理論」
アタッチメントはバター液

トンカツ調理に言い換えるとわかりやすいため、著者は乳幼児期のアタッチメント形成について「トンカツ理論」を提唱しました。アタッチメントとは、トンカツにおいて目立たないけれど、パン粉をまとうために不可欠な「バター液」であり、卵、小麦粉などをほどよく素材に合わせて調合したものです。そして「バター液」をまとう前に必要な素材をほどよく整える過程を「ボンディング」と説明しています (Fig. 3、Fig. 4.)¹⁸⁾。

科学が教えてくれること

科学的には、Fig. 3、Fig. 4で説明するように、乳幼児は第一養育者である親とのアタッチメント（ボンディング）が第一で中心にあり続ける一方で、保育者や祖父母等の複数の養育者との安心できる良好なアタッチメントが形成されることにより、多大な好影響が得られることが示されています¹⁷⁾。

好影響、すなわち健全な発達には、生まれたときから思いやりのある大人との養育的で安定した関係が不可欠です。安定した関係によって育まれる丁寧なアタッチメントは、学習意欲、良好な自己認識、積極的な社会性、その後の人間関係の質、そして好ましい感情や道徳心など、人生を送るうえで、また人間関係を構築するう

えて必要とされる力の基礎となります。具体的には他者を理解し、適切に関わる力です。

言い換えれば、乳幼児期に関わる大人との良好な関係があるからこそ、他の子どもと大人に援助してもらいながら良好な関係を築くことができ、それが生涯の人と関わる力の土台になるということです^{19) 20) 21) 22)}。

先行研究において、第一養育者や保育者等との健全な関係を持つ子どもは、他者の感情、ニーズ、思考に対する洞察を深める可能性が高く、それが他者との協調的な相互作用や良心の芽生えの基礎となると言われています。また、敏感で応答的な親子関係は、乳幼児のより強い認知能力、学校での社会的能力や仕事の能力の向上と関連しており、社会的／感情的発達と知的成長の関連性を示しています。家庭環境（おもちゃ、活動、家庭内での相互作用など）の質もまた、早期認知および言語発達と強く関連しています^{16) 23) 24) 25) 26) 27) 28) 29) 30) 31)}。

コロナ禍が乳幼児の発達に及ぼす影響

発達における「臨界期」は、ローレンツのハイロガンのヒナの実験が有名ですが、人には感受性期というものがあります。感受性期とは、人の脳の学習効率が最も高い時期のことを言います。人の学習には3つの大きなピークがあり

ます。視覚などの感覚を担う皮質領域の臨界期は、乳児期に開始し、その後完全に終了します。言語や高次認知機能（推論する、読む、計算するなど）の臨界期は感覚の感受性期よりも遅く開始し、完全に終了することはありません³²⁾。

Fig. 5は、ヘンシュらの作成した感受性期の説明図です。人間の脳の感受性期の中で比較的早く訪れるのが「視覚」と「聴覚」です。そのため人は「見ること」「聞くこと」において、乳児期に周りの環境から大きな影響を受けて育ちます。しかし、生後数年できっちりと閉じてしまう「感覚」の臨界期を、COVID-19禍で過ごした乳幼児が日本にはたくさんいます。

現在、保育者のマスク着用により、乳幼児がアタッチメントを形成する大切な時期に、保護者の口元は見えても、一日の大半を保育施設で過ごした乳幼児は、重要なアタッチメント形成者の保育者の口元を見て育つことができません。もしくは既に3年が経過しているためできなかつたと言えます。マスクによって遮られるのは口元だけではなく、アタッチメントを形成する保育者の表情についても目元しか見ることができませんでした。五感のひとつの嗅覚においても、保育者のマスク着用は嗅覚情報からはじまる乳幼児と保育者の相互的で応答的な「サーブ&リターン」の欠如をもたらすため、

アタッチメント形成に支障をきたすことが危惧されます。

乳幼児期は言葉の発達や表情から感情を読み取り、自分の感情を分化させていく大切な時期でもあります。アタッチメント形成に正しい大人が複数必要のように、言葉の発達においても、近年の学習理論を照らし合わせると複数の信頼できる、正しく発音する大人が必要なことは科学的に明らかです^{33) 34)}。

子どもの発達を守る「担当制」「緩やかな担当制」

どのような状況下であろうと、乳幼児期の発達は一度きりしかなく、やり直すことはできません。

乳幼児は1人だけではなく2人以上の大人と健全な関係を築くことができますが、乳幼児が信頼する保育士等の大人との密接な関係が、乳幼児と親とのボンディングやアタッチメントを妨げるという科学的証拠は今のところありません。そして慣れ親しんだ親や保育者等から長期間離れるという経験は、乳幼児にとって大切な人との「離脱」と「再接続」を繰り返すこととなり、乳幼児に精神的苦痛を与え、発達に悪影響を及ぼす可能性があることが示唆されています。マスク着用保育が長引き、今後マスクを外すようになったとき、それが一時的であっても、

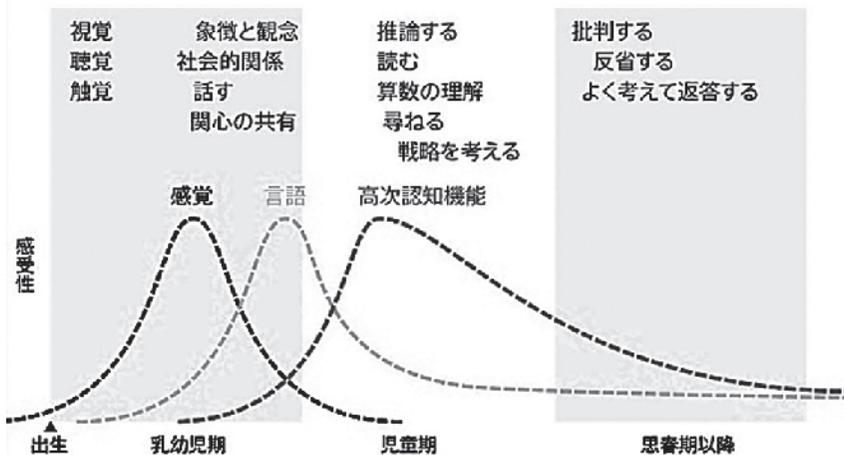


Fig. 5. 人の脳の感受性期

引用元：T. HENSCH; MCCAIN, M.N., MUSTARD, J.F., & MCCUAIG, K. EARLY YEARS STUDY 3 CH. 2 (MARGARET & WALLACE MCCAIN FAMILY FOUNDATION, 2011).

長期的であっても、保育施設の乳幼児は離脱と再接続を経験することになるかもしれません。

また、多数の保育者が頻繁に入れ替わる交代制の保育体制が、人生の初期に貴重な学習機会を提供するという信念を支持する科学的証拠も今のところありません。家族内の持続的で信頼できる関係の重要性はよく理解されていますが、保育環境における安定した予測可能な関係の必要性はあまり認識されておらず、保育者の入れ替わりが激しいことによる急激な変化がもたらす破壊的な影響は、あまりにも軽視されがちです^{35) 36)}。

保育者の温かいサポートは、社会的能力の向上、問題行動の減少、学齢期の思考・推理力の強化など、子どもの重要な能力の発達に影響を与えます。しかし、残念なことに、質の低いケアに、このような利点はありません。米国では、多くの保育施設の保育者の離職率が高く、保育の質も不十分で、一般的に質の低い保育が提供されており、乳幼児期に家庭外保育を受ける時間が長いと、子どもが学校に入学するまでに不従順さや攻撃性が高まるというリスクも示唆されています^{16) 27) 28) 37) 38) 39) 40) 41)}。

したがって、日本において進められてきた「担当制」および現代の保育者の就労時間をカバーするために編み出された「緩やかな担当制」による、発達の専門知識を持った保育者による継続した適切な乳幼児への関わりが、発達を考慮したマスク着用の考え方と共に必要です^{42) 43)}。

【引用・参考文献】

- 1) Young Children Develop in an Environment of Relationships: Working Paper No. 1 (harvard.edu) UPDATED & REPRINTED: OCTOBER 2009
- 2) 七木田方美. 「新しい生活様式」における保育施設での乳幼児の変化 —COVID-19感染拡大第5波直前の現役保育士への調査の考察—。比治山大学短期大学部研究紀要。2022 : 57 : 17 - 26
- 3) 七木田方美. 保育者のマスク着用保育が乳幼児のアタッチメント形成に及ぼす影響—保育における「におい」に焦点を当てた考察—。比治山大学短期大学部研究紀要。2023 : 58 : 9 - 18
- 4) Berscheid, E., & Reis, H.T. (1998). Attraction and close relationships. In D.T. Gilbert, S.T. Fiske, & G. Lindzey (Eds.), *Handbook of social psychology*, Vol. 1 (2nd Ed.). New York: McGraw-Hill.
- 5) Collins, W.A., & Laursen, B. (1999). Relationships as developmental contexts. *The Minnesota Symposia on Child Psychology*, Vol. 30. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 6) Dunn, J. (1993). *Young children's close relationships: Beyond attachment*. Newbury Park, CA: Sage Publications.
- 7) Reis, H.T., Collins, W.A. & Berscheid, E. (2000). Relationships in human behavior and development. *Psychological Bulletin*, 126 (6), 844 - 872.
- 8) Dawson, D., & Fischer, K.W. (Eds.) (1994). *Human behavior and the developing brain*. New York: Guilford Press.
- 9) Panksep, J. (1998). *Affective neuroscience*. New York: Oxford.
- 10) 七木田方美. 用語説明「サーブ&リターン」。和顔愛語 (比治山大学短期大学部幼児教育研究会)。2023 : 51 : 57
- 11) Bornstein, Marc (Ed.) (2002). *Handbook of parenting* (2nd ed.). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Assoc.
- 12) Cassidy, J. & Shaver, P.R. (Eds.) (1999). *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications* (pp. 89 - 111). New York: Guilford.
- 13) Cochran, M., Larner, M., Riley, D., Gunnarsson, L., & Henderson, C.R., Jr. (1990). *Extending families: The social networks of parents and their children*. New York: Cambridge University Press.
- 14) Fogel, A. (1993). *Developing through*

- relationships: Origins of communication, self, and culture. Chicago: University of Chicago Press.
- 15) Rogoff, B. (1990). Apprenticeship in thinking: Cognitive development in social context. New York: Oxford University Press.
 - 16) Shonkoff, J.P., & Phillips, D. (Eds.) (2000). From neurons to neighborhoods: The science of early childhood development. Committee on Integrating the Science of Early Childhood Development. Washington, DC: National Academy Press.
 - 17) Thompson, R.A. (1998). Early sociopersonality development. In W. Damon (Ed.), & N. Eisenberg (Vol. Ed.) Handbook of child psychology, Vol. 3: Social, emotional, and personality development. (5th ed., pp. 25–104). New York: John Wiley & Sons.
 - 18) 七木田方美. トンカツ理論 —アタッチメントとは素材に合わせてつける卵や小麦粉のようなもの—. 和顔愛語 (比治山大学短期大学部幼児教育研究会). 2021; 49: 31–35
 - 19) Belsky, J., & Cassidy, J. (1994). Attachment: Theory and evidence. In M. Rutter & D. Hay (Eds.), Development through life. (pp. 373–402). Oxford, UK: Blackwell Scientific.
 - 20) Thompson, R.A. (1999). Early attachment and later development. In J. Cassidy & P.R. Shaver (Eds.), Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications (pp. 265–286). New York: Guilford Press.
 - 21) Thompson, R.A. (2000). The legacy of early attachments. *Child Development*, 71 (1), 145–152.
 - 22) Waters, E., Kondo-Ikemura, K., Posada, G., & Richters, J.E. (1991). Learning to love: Mechanisms and milestones. In M. Gunnar & L. Sroufe (Eds.), *Self processes and development. Minnesota Symposia on Child Psychology*, Vol. 23. (pp. 217–255). Hillsdale NJ: Erlbaum.
 - 23) Bradley, R.H., Caldwell, B.M. Rock, S.L., & Ramey, C.T. (1989). Home environment and cognitive development in the first three years of life: A collaborative study involving six sites and three ethnic groups in North America. *Developmental Psychology*, 25 (18), 217–235.
 - 24) Bradley, R.H., Caldwell, B.M., & Rock, S.L. (1988). Home environment and school performance: A ten-year followup and examination of three models of environmental action. *Child Development*, 59 (2), 852–867.
 - 25) Estrada, P., Arsenio, W.F., Hess, R.D., & Holloway, S.D. (1987). Affective quality of the mother-child relationship: Longitudinal consequences for children's school-relevant cognitive functioning. *Developmental Psychology*, 23 (2), 210–215.
 - 26) Gottfried, A.W., & Gottfried, A.E. (1984). Home environment and early cognitive development. New York: Academic Press.
 - 27) Peisner-Feinberg, E.S., Burchinal, M.R., Clifford, R.M., Culkin, M.I., Howes, C., Kagan, S.I., Yazejian, . . . Zelazo, J. (2000). The children of the Cost, Quality, and Outcomes Study go to school: Technical report. Chapel Hill, NC: Frank Porter Graham Child Development Center, University of North Carolina at Chapel Hill.
 - 28) Pianta, R.C., Nimetz, S.L., & Bennett, E. (1997). Mother-child relationships, teacher-child relationships, and school outcomes in preschool and kindergarten. *Early Childhood Research Quarterly*, 12 (3), 263–280.

- 29) Kochanska, G., & Thompson, R.A. (1997). The emergence and development of conscience in toddlerhood and early childhood. In J.E. Grusec & L. Kuczynski (Eds.), *Parenting and children's internalization of values* (pp. 53 – 77). New York: Wiley.
- 30) Thompson, R.A., Meyer, S., & McGinley, M. (2006). Understanding values in relationship: The development of conscience. In M. Killen & J. Smetana (Eds.), *Handbook of moral development*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 31) Kochanska, G. (2002). Mutually responsive orientation between mothers and their young children: A context for the early development of conscience. *Current Directions in Psychological Science*, 11 (6), 191 – 195.
- 32) Jon. B. “Neurodevelopment: Unlocking the brain”. *Nature*. 2012-07-04. <http://www.nature.com/articles/487024a>, (参照2023-02-05)
- 33) デズモンド・モリス. 今福道夫訳. *子どもの心と身体*の図鑑. 東京: 柊風舎, 2010 : 82 – 84
- 34) 針生悦子. *乳児とことば*. 母子保健. 2021 : 750 : 1 – 3
- 35) Howes, C. (1999). Attachment relationships in the context of multiple caregivers. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications* (pp. 671 – 687). New York: Guilford Press.
- 36) Howes, C.H., & Ritchie, S. (2002). A matter of trust. New York: Teachers College Press.
- 37) Lamb, M.R. (1998). Nonparental child care: Context, quality, correlates. In W. Damon (Ed.), & I.E. Seigel & K.A. Renninger (Vol. Eds.), *Handbook of child psychology, Vol. 4: Child psychology in practice*. (5th ed., pp. 73 – 134). New York: Wiley.
- 38) NICHD Early Child Care Research Network (2000). The relation of child care to cognitive and language development. *Child Development*, 71 (4), 958 – 978.
- 39) NICHD Early Child Care Research Network (2002). Early child care and children's development prior to school entry: Results from the NICHD Study of Early Child Care. *American Educational Research Journal*, 39 (1), 133 – 164.
- 40) NICHD Early Child Care Research Network (2003). Does amount of time spent in child care predict socioemotional adjustment during the transition to kindergarten? *Child Development*, 74 (4), 976 – 1005.
- 41) Pianta, R.C. (1999). *Enhancing relationships between children and teachers*. Washington, DC: American Psychological Association.
- 42) 七木田方美. ゆるやかな担当制. *和顔愛語* (比治山大学短期大学部幼児教育研究会). 2022 : 50 : 34 – 35
- 43) 七木田方美. コホーティング. *和顔愛語* (比治山大学短期大学部幼児教育研究会). 2022 : 50 : 32 – 33